



陰本孝哉傳

三

^ 13  
3581  
3





門 13  
 號 3581  
 卷 3

文榮堂發兌文房書目

考槃餘事

明學小著  
 東溪源謙校

白紙摺明朝綴  
 帙入全部四冊

題畫詩選

岡崎廬門著

全仕立全三冊

書畫皆宜

笑癡氏撰輯

白紙摺明朝綴  
 帙入全部三冊

題畫詩剛

森川竹憲著

全仕立全一冊

書舖

浪華心齋鐵應橋北第五街

前川源七郎

全

35.1.22



平孝感傳卷之三

目錄

竹多針小以命と家と体と張  
 毛刺と斗田痛の圖  
 春木又子花園と鳥と圖  
 春珠小以命と志と運する張  
 新毛象宗社新苑の張  
 櫻殿和尚依法の圖  
 去珠見才の望と玄圖

會本洋書專賣店

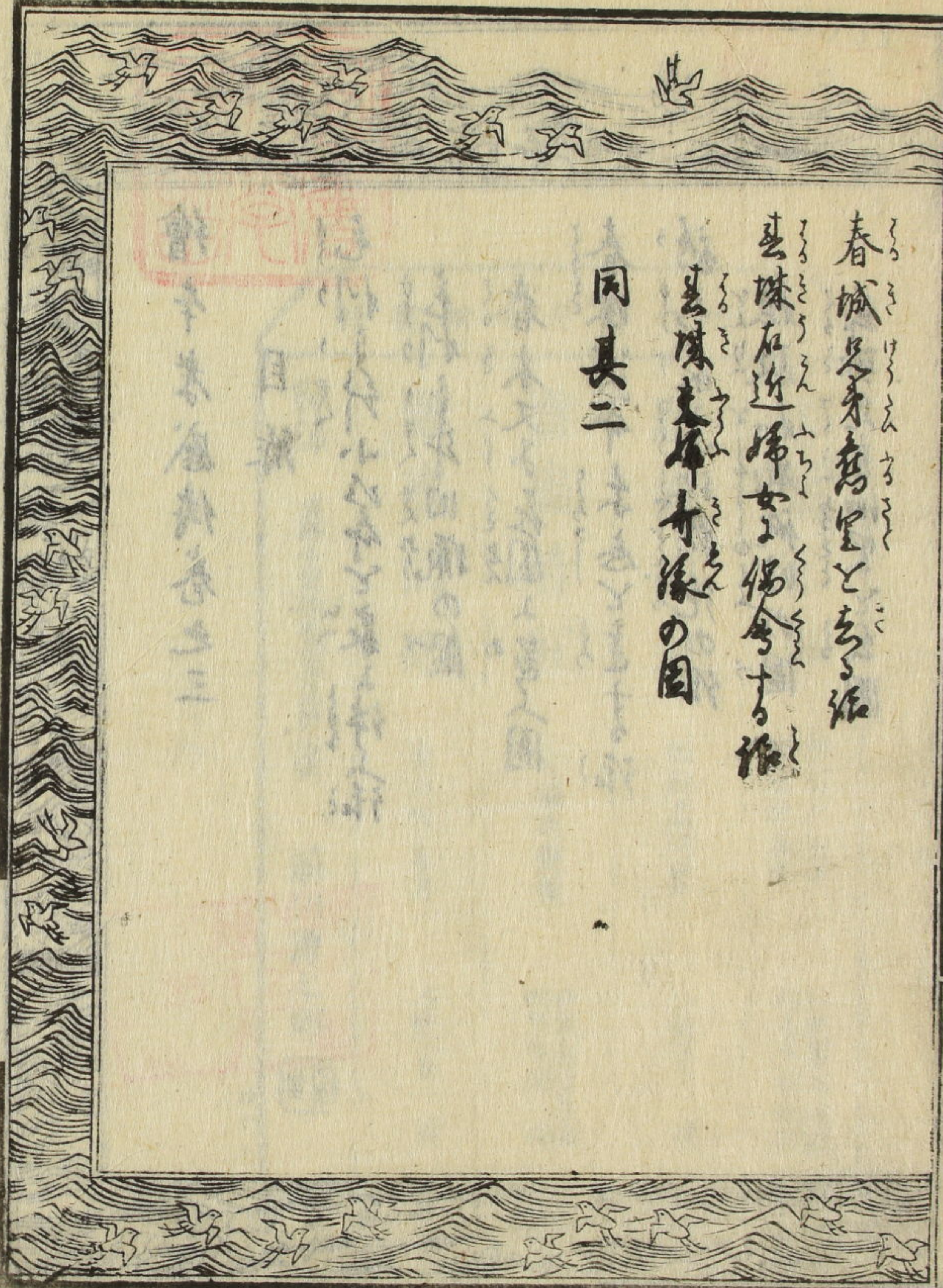


春城見牙鳥堂と云ふ作

去珠右近婦女と偶合する作

去珠左衛門十後の目

同其二



繪本孝威傳卷之三

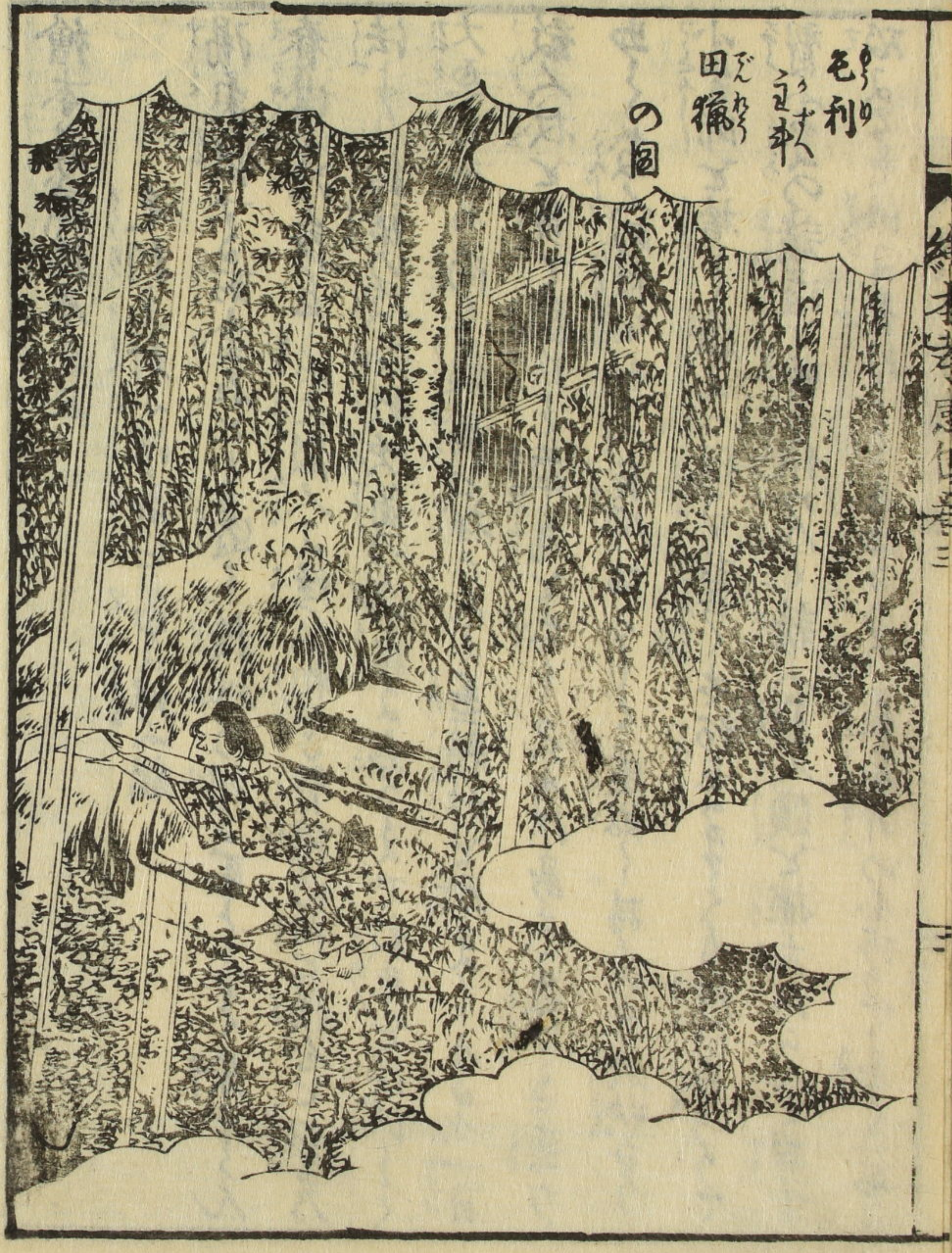
毛利主計小次郎と京師と云ふ作

陽氣散する所金石とも透し精神の列る所と云ふ作  
春城小次郎と云ふ石上散人又後ひ初子習練の切と積念と云ふ乃  
法より釣糸の技詠吹笛の逸直ぐ云ふまで教奉と云ふ作  
大要と極め尚も蘊奥と探らんと蓋精神と願ふと云ふ作  
散人杖と穿て飄然と草庵と出くふ小次郎又終るまで云ふ作  
ゆく散人の杖と穿て吾師ゆと云ふ遠遊と終るの形杖と云ふ作  
小生師と捨く誰より後ひ葉く老何と云ふも後ひ奉つりて  
習ふ云々の諸道と極め作りんと精小散人頭と揮方と云ふ思ふ  
故よこそ汝も若びく云物るなり系雲介の云りて云く二云





毛利  
の  
田  
の  
園





止る幸と歎せ渡す本も教奉け地は是と留めく公敵兼侍今  
 よりて又異方より移んと思ふ因く汝と伴人の最易々をそそ  
 極知の面の諸道已に傳終りて又別な扱く度さ法るけし  
 後の只當自如とく練磨の切と接こそね要る是亦庵中お一  
 月の程より汝と易く珍角だし汝が身力走るはじと袖を  
 拂く走り去る小次再ひ返んとするは其速るるや疾風の如く一  
 瞬は教町の海を隔ては初ては神仙中の入るを悟り去と交して  
 庵中より憤りゆく日裸の言葉と初め早二句の目と色く一  
 歩の寂まをそそく一歩を驚くは又脱然と展げて深情と  
 暢せしおろく夕陽の影を松山の霜垂れ移るひるく一陳の風小  
 浜く村の影り又陰おくは麦圃と耕は田子花野は林の村を

等が彼方け方走幸小快極まよも奥ありてを又跳入たるおま  
 其状短くぬ武士持ぬ装々く奴僕は小銃と持せ竹麻又倚りて  
 人やゆると同小次形勢をく出逐く恭く省一礼せくは武士小次形  
 と見く疾く館中のものるるや野遊は出け村面は急く内形  
 阻らるぬ幸と凌ぐと物ありは賞与へよとよよぞ小次は唯せ  
 應く内は入ほどせと捨人の位度する草室は影のあたる松  
 なくぬ何ぞとんと躊躇せしかやうそひききく観列を一首の歌と幸  
 一被武士の影り又出け武士不審しるがうたよく履さ月るよ  
 身の何ぞよ浦ぞおろぬ山吹の花をむくの富れゆへと  
 と書りりくはぬと互吟詠くく確とよと拍山吹と手折くみ  
 ありと昔なるたるのとそひよりおろく秋の末る道を夜とそ

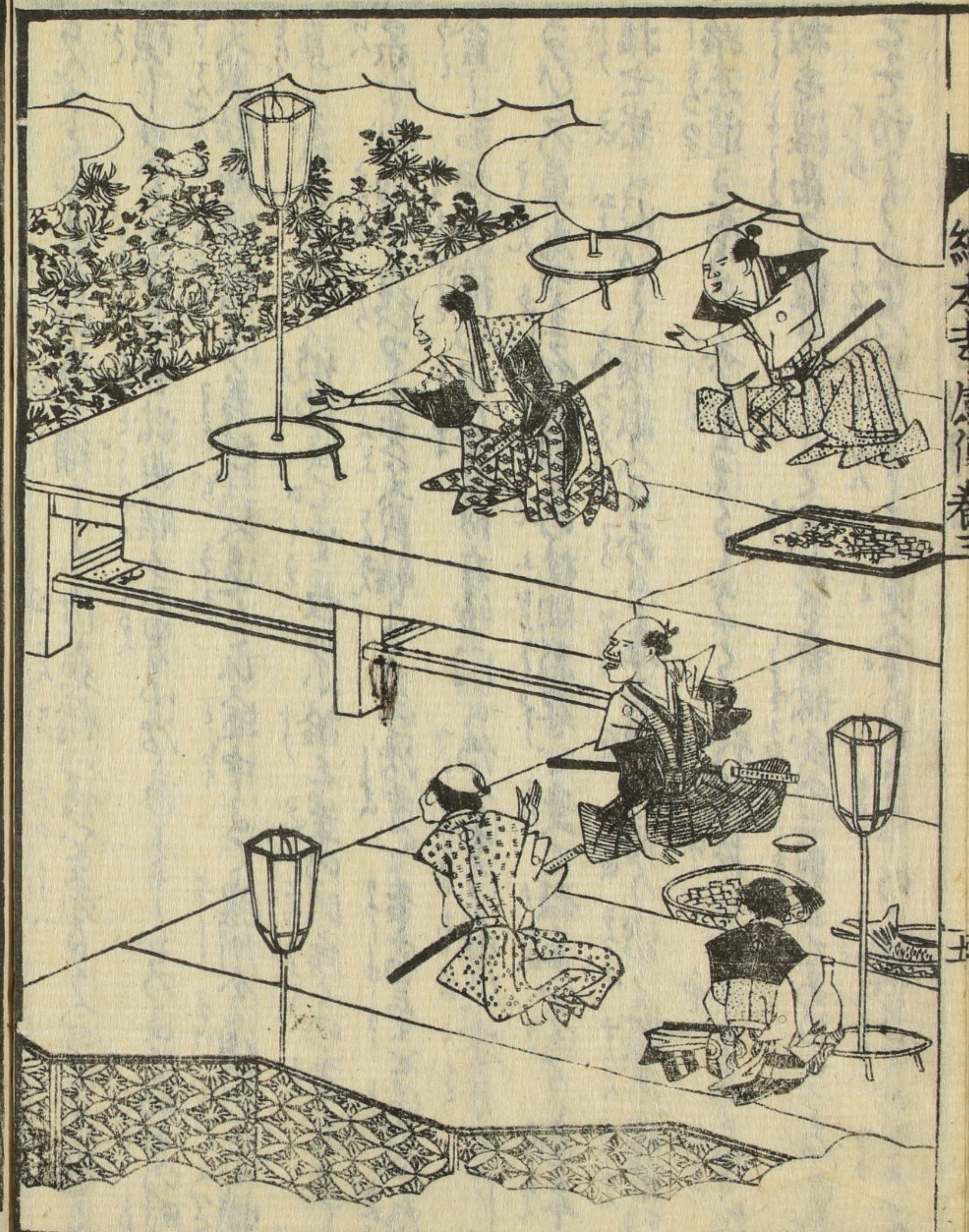


山吹の着ぐるやうと西巻の扱ふと流儀のあらうとある二首の  
 も後之介の餘情玩味する又晝は素姓床しとわ奉の春初ま  
 奴僕と異方へをりてる具と頼るの同席の中と云ふとくしと内  
 又入へる小次郎心ゆる淡茶ととり扱売の太と侍武士情く  
 席のまゝと見ると小次郎は又お對ひ某の勝手山老長毛利を奉と  
 云者より政勢と管ひ同殿又老世遊より託帳装て農家の初階  
 と何ひの里の儉奢と揮る所又今日け居人半ばもまより少奉のお  
 人と見る又面顔優美はして農家の子弟又あはばそのう人又扱  
 秋葉と展げ壁間又本報後刀とある取杖最不需る道ある  
 不由何人のなありて田野は迄と居せるるがれおの家系および  
 父母の姓名と受けたぬらん小治と遠近人々示すゆきの給る

らんうとむよ再び奉補しく沙類情の役とあるう人さゆる色と  
 隙一ひぐさ小生春世典膳が二男小治高とやをのよて初めの耐  
 又典膳源流仕つる若狭後退さひ途中よて濃州今頃のつ士小備  
 真が義子とあり彼地よて生長し拾三歳の以云くの事ありて  
 家と出高地よ後又典膳よりの活字と若首をよと運んお  
 合し不惣義補の由見九郎右衛門の侍人あり進退途方とりし  
 るひの草庵の直石上教人の技助教存とまで教奉と送り面奉  
 指七憲よ及びく頃教人よふと居るは向り此と教奉進道の  
 始末遺る不ゆく有者まがぐとく後つ侍しふま平太の巻の宛  
 初巻懐初よ遺るよと一と聞たる春城氏の二男よてありしうたふ  
 こを初より君方の女奉とへ見入ざりし是下の志預る父の恩たよ



春木  
足子  
花子  
遇小  
圖



細木老屋傳卷三



武士の本志又表は甚感賞せり今日相見するも不測の奇縁  
 対する又典膳とい一方うぬ親家るまをそその父の怒と致し親子  
 の情と全うししん事某が公裏よりありありも是らうくるまを  
 去らうと尊又典膳武道文藝俱の堪結るうと人ども公剛なる  
 がゆへに専武道より才とあり子もく優大の楚を好むとくわ和の  
 優越の才と本く其怒と解はハ号しし事未假士と偽らま  
 武藝の二技試は一先でん小治ら敢く拜せは壁間も舞る檢刀と  
 少るより早く電光のぞく素操く極端の丸木柱と候はゆに  
 十通斗実なるよもの表は狂は檢刀のめんほの中しを死も  
 規整と用て鴉たごく其園は皮剥くハ斗々感業一知る  
 練業あり人者そその父の怒と致せる縁より今より某が志は

付ひ置よ斗らうとと事よ小治郎と付ひて城中へこそおと  
 ても

春味小治郎素志をなする話

毛利主計を喜味小治郎と家よ付ひ其弟人と試し見るよ相  
 顔の優美す瘵の長じたるのそらうび其氣を充剛勇よりく  
 天晴君の用よまづと生さるりうぶを愛し来よ又典膳よ  
 次第と若んく心ひしと典膳が生業義家の仕にして汗滴よ  
 来朝よまづと斗り密よ斗と口し打極後園の草園  
 白まばら典膳と初し同僚の石友は又軍と招よ草園の中よ  
 林柵と役主客扱と口して相たよ之と賞以て来よ斗ハ頗  
 の風流のまらうて後園よ口香おくの草花と舞く時よ造化



妙用と然哉、瀟灑意外の生軍と除るざる深きと慕ひ、中  
 華と愛し、年々又舞臺の人も花形と惜し、煙揚と粧ひ、  
 隕達の天真と失くせる世俗の流風と好む花英の大小と撰む色紙の  
 美白、褐紅と分び、己が位を叢するは、世に圍むる六、清露の幽  
 棲、波云の宮庭も想像、身最深く、酒令稍甜る、時多斗小治と  
 牀柳のては、踏ばし、や、典膳と對ひ、その手、小治と、踊り、某  
 が、親家の子、舞するが、知雅より、雅と、その身と、花を、さ、方々、  
 願く、老、足、下、義子として、之と、教育で、之は、染、め、仕、る、り、と、  
 彫る、武藝の、才、り、加、つ、る、又、足、上、の、教、授、と、  
 舞、つ、る、る、る、る、る、る、る、る、る、る、る、る、る、る、る、る、  
 々、ま、ど、典、膳、故、こ、そ、あ、り、り、と、熱、が、年、の、相、顔、と、見、る、  
 二、面、の、形、か

起居、初、休、又、ある、まで、ま、あ、り、九、房、右、房、の、ま、ま、  
 と、錦、た、ま、ご、ぶ、い、く、春、家、と、逐、電、で、一、二、男、小、治、形、  
 と、い、つ、る、ま、ま、人、家、の、面、を、ま、ま、と、流、と、る、と、  
 誰、と、ら、る、と、情、さ、る、ま、ま、人、の、中、ら、ひ、さ、る、と、  
 色、又、出、さ、ば、あ、ま、さ、る、ま、ま、人、の、形、花、形、  
 又、も、義、子、と、して、家、又、付、り、ん、又、其、お、人、の、剛、  
 類、た、る、柳、く、又、若、たり、美、粧、の、采、初、ハ、  
 脚、子、と、振、より、早、く、上、座、より、ま、ま、人、ま、ま、  
 とも、初、ま、る、ま、ま、あ、る、と、端、座、して、左、刀、  
 ぬ、り、ま、ま、林、膚、又、元、塞、り、て、  
 と、  
 且、其、因、愛、の、ま



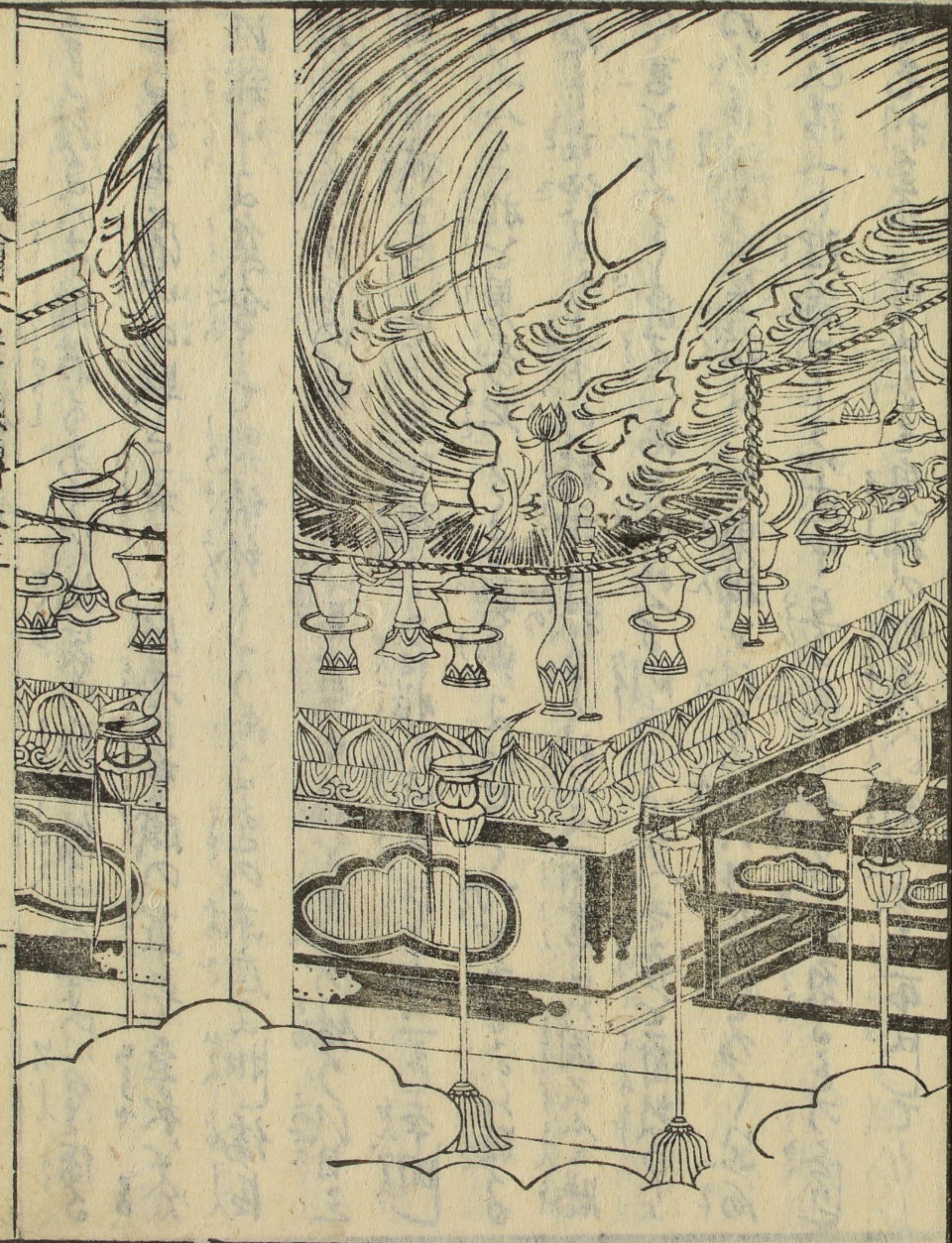
情は引き思つども後縁せり身年争と意く法く典膳と座  
又付しり色と和つげて云中下は少奉と令息とそりみ付  
小せしるなご我氣最威伏するは場たりとのへども大勢を細  
瑾と称ひ法家の所用はもまご少奉と空しく失りるは基情  
をし故ごそ其儀又細とほく養子と名付ごまば故の因家小  
備氏へ全く我と失ふもあはば是下は利解と云ゆらば系鳥  
帽子親とあり段辰と撰で赤袋と着し袴と揃て是より更に  
と云一ふ座中のへくを然るはごさ斗ひあり某等も保みと  
ありて事と助んと兵管切備せ一ふ典膳も是より喜んで佐ひ  
再び宜容軟とらして其日を各家より帰るる

鶴毛家宗社御絶の話

初て毛利主計と良辰と撰んで小治所が冠袴と執りるは初名を  
更く春味右近と名をよせ典膳が方へ送りし又其お人の儀  
氣るる状と内くそとせ一ふ大守忠次は太は候とせ給ひ新又石出  
されく迎習は加へ給ふ是は於てなを年々の素志と全座し  
天晴忠初と初とく英名と後よ番人と是文書の存ととあひ候り  
るく初仕せしる太は君の志は適ひ又子之人共は國波は活一家  
門の繁栄藩中又肩と並ぶるものるく教奉と包しるは又大守忠  
次は一初の名は法は法は又極と給ふとふはく日く之氣取也  
形林羸瘦と増給ひ一ふ醫官典膳の面は行膳と俸を珍候方  
割術とそりるるも其験更なるこのころは病候の症月く  
は病候して病名とだは治定しごく日と返く大衛の宗林



三十三卷



和敬 慎 法の必



うりはよの未備君もあつて國家の存亡偏に大守の一身を倚る  
 なるまぢ藩中の駭と一方を以て老臣重祿の軍を益敷と介  
 び籍中又集會して衆議給くしり討つたの末座は批「儒臣  
 松浦孝助老臣の節又進之小臣君の所極を甚るの修う以目之  
 目の無戒と及してト益と試くは批大凶にして十又二を奉回し  
 給ふべき批と見よあぢく老醫藥又任せし切とあるゆへ修る  
 だ一古後よも上下の非批又修りし修人又周書よハ周之全勝  
 の書と修りし武王の病と修修る例ありけり人老を首救る  
 の小臣誠の心を一披以して鬼神と修るの外ははじとあつて此の  
 乙ひ修りし理論せし座中互に面と凡合せ未修るを方修り  
 乙毛利軍平修るを鬼神の理人人の測りしと亦はしてり

深くよふ心とある討つ事又修り多く武老軍陳又修んぐ  
 機舎とあるよりの修り放り當家の先君之と有り修り陰陽  
 水形修修の類と修り禁せらるるの控るまは是下の果見一理  
 ありしとくもけりぬ何ゆへとと思面の体るりしと春城典監  
 側よありしと修り毛利氏の修るまはも吾國の風と修り  
 上朝廷幕中より下士庶人よ修るまで神明佛陀は依りし小  
 修んで後美の法と修り一眞験と修るも勝り教へたし修るよは  
 定制と修りて之と困ひざるも修り又修り國を修る  
 急目たるあり修り老の徳の修道と清く法と修せし修り事  
 どと若しとまは正針首肯某も國其修るまはも藩中および國  
 中の小修りぬるまは修り陰陽の業と修り修り上と修り



之と犯さば終はち國威の清まらば及んゆと畏まきく躊躇せしが  
と今肩と焚の急あまきけ席は生合面く竊は斗て事を行  
たしと其以審法の問へるりし豊山の子以種教和尚幸ひり  
志く南園に寓せしを速く之と請て天守の程より一箇乃  
煙場と役も十日七夜の修法と行る種教和尚八箇問ゆる徳  
り又初事り又多りて一箇の安免は侍る不の種免る是を教奉の  
行力その財と色とく何と初と云こと一瞬の怠慢なく獲辱の法と  
終一丹誠と凝し行願と輝く種教あり先長重祇の面も財と  
むく煙場と守獲一徳公は國家の安免と行る形状天と初以  
るくぬゆるる宿禰魚因るりともなごう清滅せぐやあべとこと  
一を貝入たりしが怪るる七夜ある丑油の比はあつてく年齢

三斗の女は精又練衣と袖するが息結と煙場は形は一うそ  
すの事こそと毛利春雄と始り柄と極り空雲と春く居たりし  
小女は端和尚の希よをいぬゆは和尚宿業は已り思ひこ生だ兒  
道るるものゝるは徒ある丹誠と凝し行願と輝く種教あり先長重祇の面も財と  
折身の毛も種事とこととるると和者ゆしも種教と輝く種教あり先長重祇の面も財と  
りし種教押捺は必思と唱へて行らるるふ不測の事な彼女  
変異形の鬼とるり初とそけ國の地村のり暴腹の族と平らぐと坊  
せむ世の又身せんとも候お者と煙作はよは後よ跡はあはれと目としる  
主計典膳博のろ杯まのろく切付しは美形の徳は消弁は只雲  
膏と切がてくお者も依然は煙場はありて慨然と歎息の事  
及し大守の鶴免と土杯と殺し行らるるの事ふるまは事叶は種





西日本...  
三



喜峰  
兄弟  
旧里  
去國

糸...

三



たりしと云も終つては異例たる事たりと昔ありしと云  
 次のか終つて取そのも亦あは病状に付し又果しく和者の  
 初は遠く五更のやうて終つて世と辞すひいふ藩中考妣と書  
 てく時表は燭と滅したるに似く騒々くる釜中の沸くたるごと  
 く事と室町家へ云上せし幕下も蕉切の家格と因りあつた  
 深く懐孫やと維嗣子親族絶く家と継ぎと血縁のともあり  
 して逆の宗社絶絶し家中の面々吾家者と推し善計恩  
 威の君家と離るるを退散せし形状定るる世の習ひといふ  
 るがく哀しむも終つてつるる月々と終るるの涙と惜ぶるるなり  
 去体兄弟意里とまはる作

却説春味典昭父子を藩中におあくる人の涙を慕ひし一籍

業の門居るりしを主家の扶綱よりつくり再び家柄を離れ遊く  
 晴山城外は萬里とほし宵々尔後の難とせんせしり典昭  
 とし又老境に入つて封更に主家の絶たると歎哀の餘公痛の病状  
 受亦笑鬼の客とありしは九命を藩門た迫るる迄とあり  
 途方と夫よとの人も母のをとけし涙と眞の色と見せば難事  
 退薦の言と尊一專母と孝養しくるは一案中と道しるふ  
 か次第は苦肉一財も乏くありし後又初くは清め河あらん中  
 再び仕官の便と求めたるはけは若弱小童の家去るる外舅も  
 方より之職務の邦家は干渉の後あまを速く移せるなりと  
 昔ありし力とほく俄に萬里と取徹没体全く調ひしうま教  
 奉信訓一旧里とさ出さすはの漆よりつりて便服と結するは右をハ



何となく土地の名義の借まきくゆ地へ赴くこの意遣はりしる  
 名業をまきめて母は對ひ小濱より仕官の便ありとて人たぞ  
 只弟一人を納むと幸あるもいまだたあるよおあるい  
 伯父の号と重移人もいふは格別の故何となく上り方と  
 又ありて仕官せんも何となくいふは格別の故何となく上り中  
 國を因りて于録の便とせり人自給素意をせせずんば其時ゆ地へ  
 赴くともまじりしれい將に春をたてまつりて許さんと告げけし  
 母の所右邊門も必是身の納りあるよしと思ふよも何となく細  
 るくその情と許し危角詰り内早く出航ありと知らせられ流石  
 又名義を移く一人傳は航は舟乗風帆と張る一連は  
 仕後の團扇の漆まぐ着るもあつたねば是にて別と

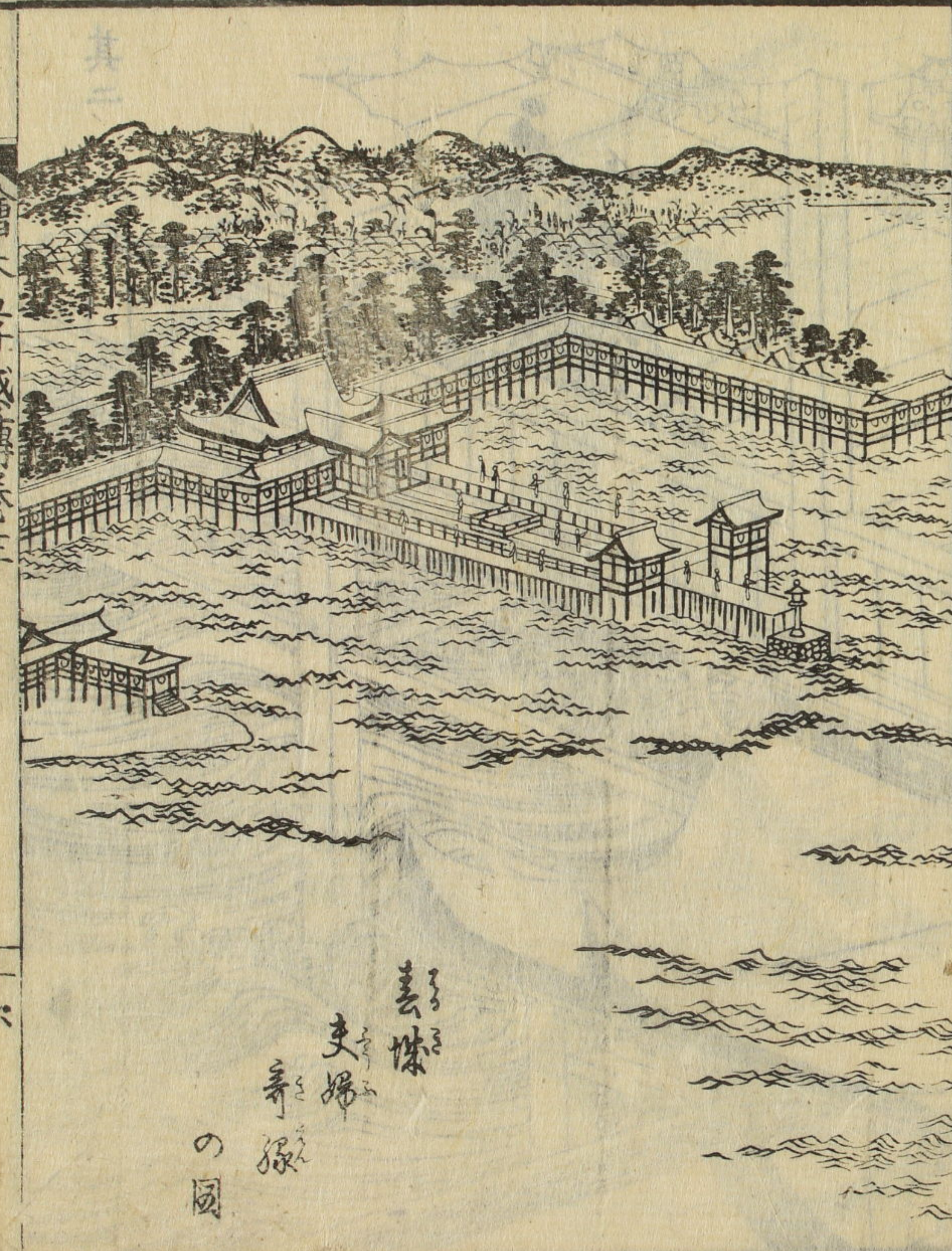
告たを六段よあがり二人をまじり品のとり者順風は舟をせて  
 上りへこそ上りしる

春株右邊婦女又偶會する話

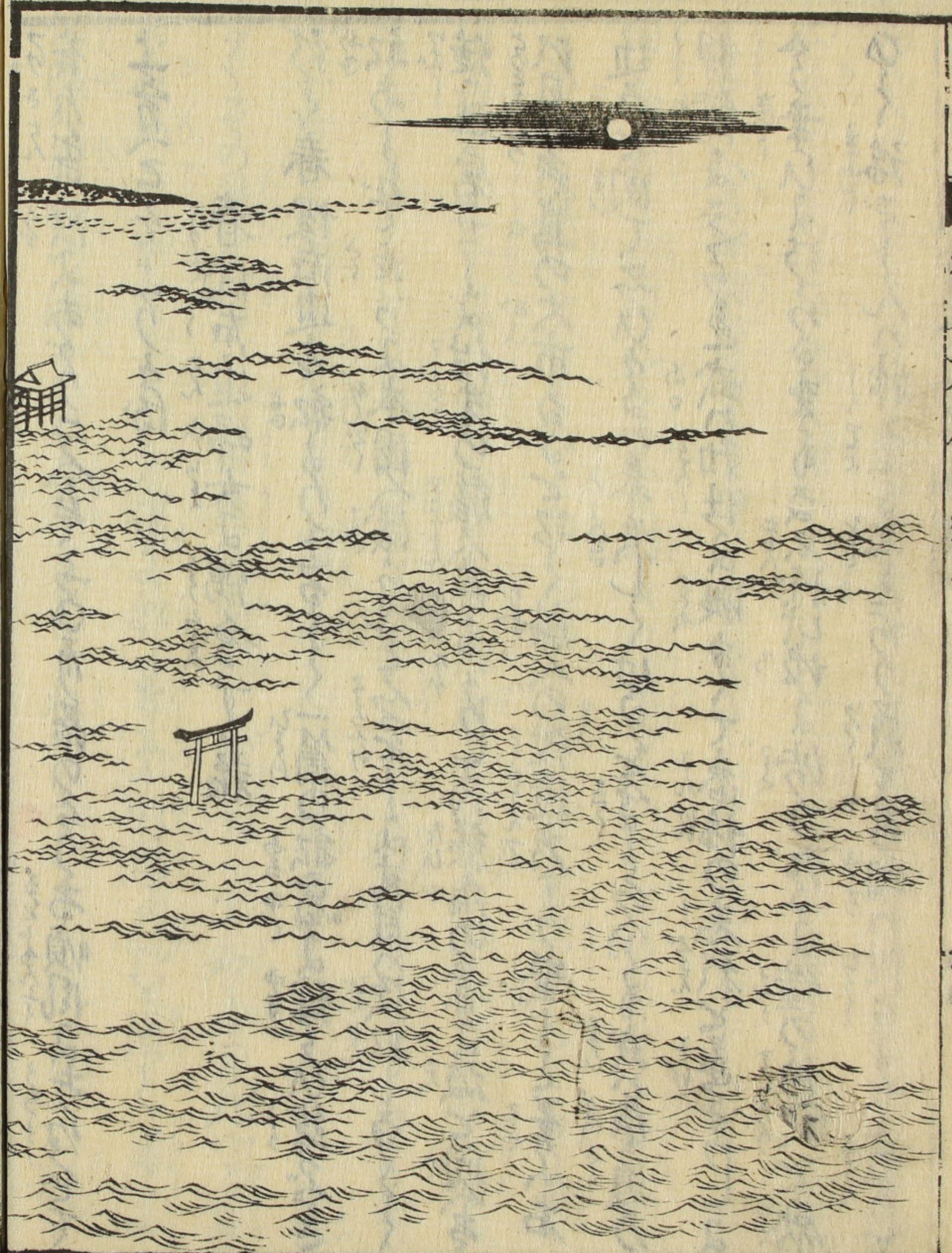
初く春株右邊舟より上る一箇の船宿は休むひはるまき  
 航あつたあちよ本國へ渡らんといふは其舟の便ありとて  
 徒又一宿せし又仕官の旅人甚多りしる旅店の者よ故と問ふ  
 以日ハ最島の入市るといふ旅人の往還者より驚くと昔も右  
 近之と問てあひるるハ年長しくけりといふと人ども或は應道乃  
 習練はさらば或ハ初仕は暇きて春株の志氣とあざりし  
 今幸ひはけりる事もある思はけ地は侍りたるは僅の修程と然  
 ひく後さうんハ神面も也とけり最害の初ハ往右より式を



會不孝或重卷二

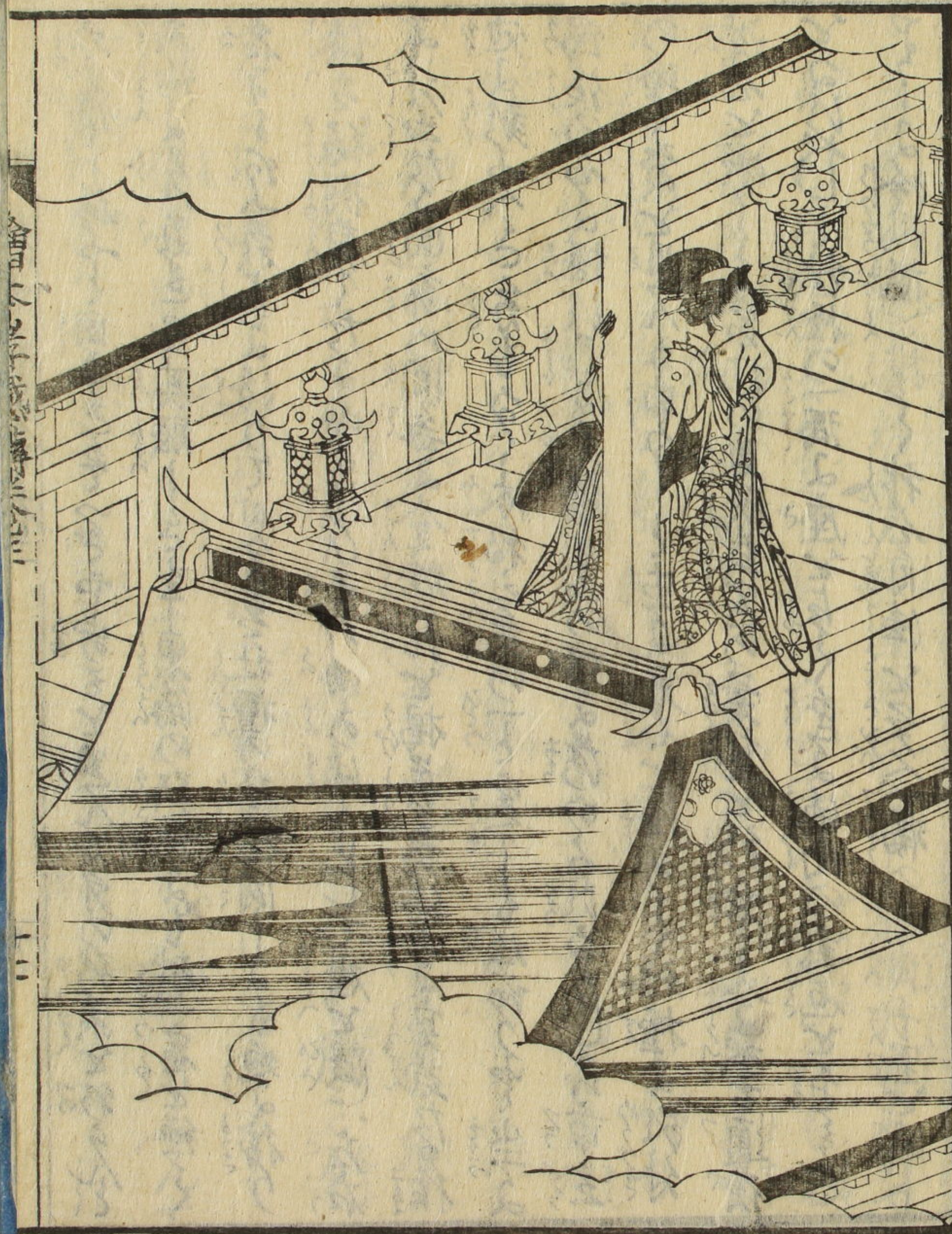


妻  
 史  
 婦  
 新  
 縁  
 の  
 園



終云外卷三





其二

糸女志願卷三



守獲一孫て圓るまきつてや歩まを思んで牙の形末を知らんと  
 大浴又えあまき其賑しと幸東海の歌詠も射一着と経く  
 名よりりふ氣真又海りて見まを社檀の結搦同りも均又後り  
 後を緑樹蔭たる少はほひる海多浦として礎と浸 左右  
 又光出たる回廊八間毎又金煙粉と揚英養海より実然たる根  
 他又影之べこ方もるく本物之象の二と定しも故何りや坐る  
 偶後のも又堪び已より陽も山の落又あひるるりし六市立  
 の隆く夜と見んも由り一と由り牙心と降めく社檀又射付  
 珠心と漱く家門の夏炎武皇の榮甚と行念今夜を通夜  
 とるびじと社檀の二隅又座ととくを海面の氣息とすまこと  
 一又冷風撫と撲く神公自降と又一編の明月千里と照し

て金波弟以の洋中と粧く光景画圖又目訓 龍城月宮もあ  
 と又心斗体境云ん方るりし六星宿の良圃るるも忘  
 まく或き多孫の妙よと困歩く又幸回廊の欄又倚りて只管  
 彫り又文は又蓋純勝の斬るると又人て体真貴さるるを奇  
 逆又腰又納り 樂管と又出く好むまの一曲と吹清せり又何  
 ぞ斗ん一人の女子とくあ後又ありて竊又社をり人おもたるもび  
 右を又対ひるひるびも便る物のをとあり賤さるるも又  
 歳下集らせぬ何れも今一曲と親べ孫人と尋む方をも優るも  
 りとるびものうると心練しく又一の秘曲を洞りし又女子うく  
 蕙す一様又て賤さるるも廢させ孫のぬ由志何れも又集るるせん一  
 樹の蔭の宿りもけせるるぬ契中こそありりゆは是の定めらる



後の宣此修の事又々重々布らせん邦来も平りかゞく其あり  
扱はと墓るる事そのいはいばとくうらるる情の在詞乃わの影  
見へくさうも剛腸の右をも情岩本るる秘が坐の愛慕の心  
ひとろしは遂に一場の情を結ひしよ云得彼方より人喜して女  
まどりの影りるりしうに云然の影まんを思きと再念を  
るの暇もさし合の管の節と後此中又宿とてさうぬ体にて  
別を免南くく来もぬくさけ地をわき目を終く本國勝ゆり  
ぞ帰るりる

繪本孝威傳卷之三 平

照陽高見其手筆

續皇朝戰畧篇

全五册

此書正編、古二行、日月ニ感ヨリ而末々近世ノ戰畧ヲ記スニ  
及ス故、先生新ニ續編ノ著アリ乃チ其載スル所ハ文化年間魯西  
亞ノ人寇ニ起リ、尔来中國又ハ西東ノ戦ヒ近年佐賀台湾 諸役昨  
年朝鮮江華島ノ捷ニ至マデ大小ノ諸戦ヲ記シテ、名将勇士ノ奇勲  
偉畧洩ス所ナケレハ、兵家必讀ノ書タルハ言フマダズ、今日開明 化ノ由テ  
興ノ所以ス者、マタ戦ニ出レハ、此書人々之ヲ閱セサル可ラス。四方君  
子輩ニ頼リニ祝マテ、其奇書タルヲ知り玉

大阪書肆

前川文榮堂發兌

此書は孝威傳の續編にして、皇朝の戦畧を記すに及ぶ故、先生新に續編の著あり、乃ち其載する所は文化年間魯西



